

GEO BON: 生物多様性観測ネットワーク

矢原徹一(九州大学大学院理学研究院)

生物多様性は、生態系・種・遺伝子のレベルに見られる多様性を包括する概念である。これら3つのすべてのレベルにおいて、生物多様性は急速に失われつつある。この状況に対して、「2010年までに地球規模での生物多様性の損失を有意に減らす」という目標(2010年目標)が設定され、世界各国でさまざまな保全努力と観測が行なわれている。しなしながら、これらのデータを統合し、生物多様性変動を地球規模でモニタリングするシステムは、確立されていない。また、生態系・種・遺伝子レベルの生物多様性をどのような指標で評価するかという課題もまた、未解決のまま残されている。

このような状況を改善するために、地球規模での生物多様性変動を最新の情報にもとづいて評価するシステムを構築する努力が開始された。GEO(地球観測グループ)の下に設けられた生物多様性観測ネットワーク(GEO BON)は、生態系・種・遺伝子レベルの観測情報(図1)を地球規模で一元的に集約・管理し、オープンアクセスデータリソースを確立すること、およびこれらのデータを統合し、解析するためのツールを開発することを急務としている。このネットワークは、自らデータをとるのではなく、すでに世界各地で得られている現時点でベストのデータを集約することを課題としている。そして、これらの解析を通じて、生物多様性の損失を促進している因果の連鎖(図2)を評価し、2010年目標の達成状況の評価に寄与することを課題としている。

2008年4月8-10日にポツダムで開催されたワークショップにおいて、GEO BON 提案文書が討議され、5月12-14日に開催された第9回生物多様性条約加盟国会議は、GEO BONをサポートすることを決定した。2009年にはGEO Plenaryによって計画が承認される見通しである。そして2010年の第10回生物多様性条約加盟国会議(名古屋)において、最初のプロダクツが公表される予定である。

わが国では、第10回生物多様性条約加盟国会議に向けて、生物多様性総合評価を独自に実施する。また、これまでも、わが国では生物多様性の変化に関してさまざまな調査と評価が実施されており、データ保有量としては国際的に見てきわめて高い水準にある。しかしながら、データの統合の点では、大きく立ち遅れているのが現状である。GEO BON に協力し、国際的なオープンアクセスデータリソースを確立することは、生物多様性条約加盟国であるわが国に課せられた国際的使命と言えるだろう。

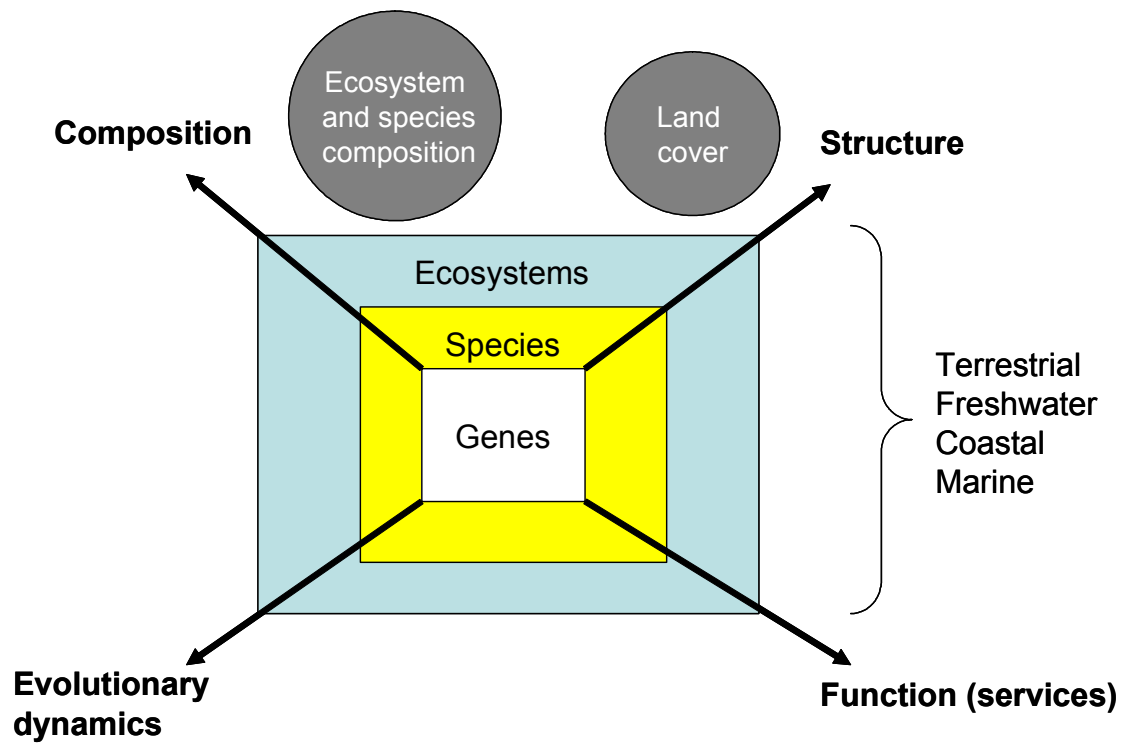


図1: GEO BON が対象とするデータの階層構造

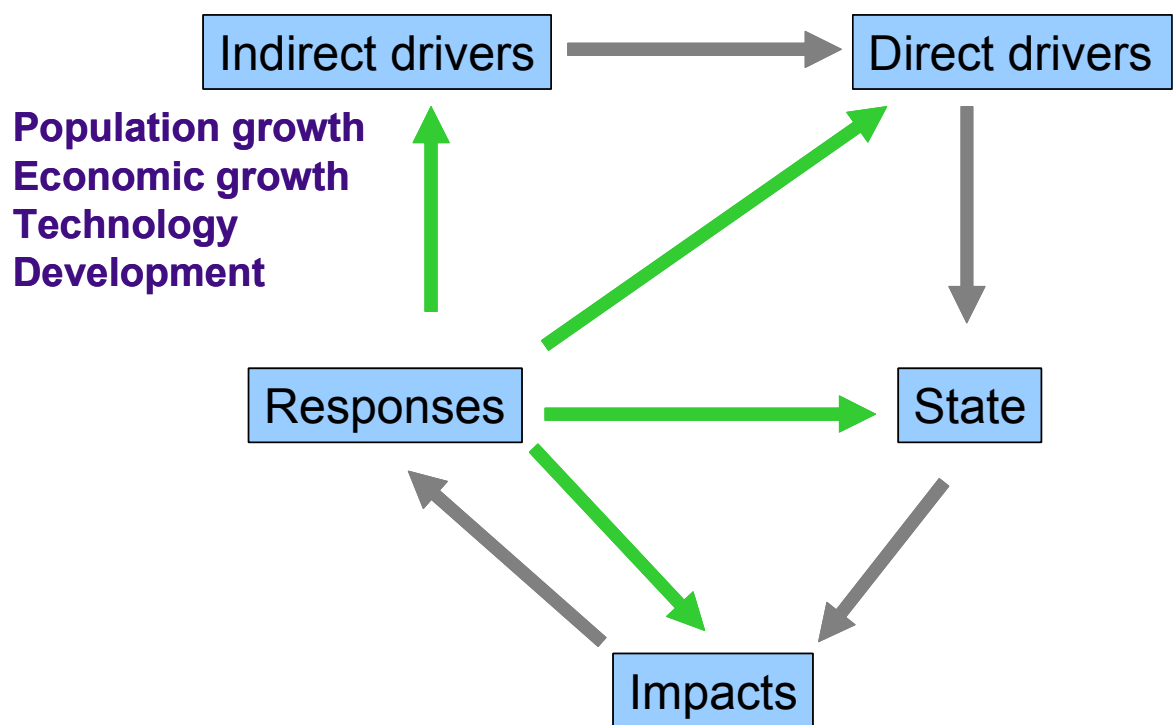


図2: GEO BON が評価する要因・効果間の関係